



筑紫女学園大学リポジット

A Semantic Network of Light Verb Constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/563

軽動詞構文と意味のネットワーク

緒 方 隆 文

A Semantic Network of Light Verb Constructions

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は(1)のような軽動詞構文を、カテゴリーの観点から考察する。

- (1) a. They had a swim in the pool next to the restaurant. c. She gave a cry of joy on recognizing her son.
b. The express made a brief stop in Kobe. d. She took a bite from her sandwich.

軽動詞の研究は、Jespersen 1942, Dixon 1991, Wierzbicka 1988, Huddleston 1984, Halliday 1994, 相川 1999 他、数多くなされている。しかし軽動詞として扱う対象も異なり、どこまでが軽動詞かはっきりしない。またアプローチも統語的、意味的など多様で、扱う英語もオーストラリア英語だったり、共通の土台での議論に必ずしもなっていない。名称においても light verb 以外にも、様々な名称が用いられている。つまり軽動詞構文はしっかりあるが、確定したものとしての感がない。そこで本稿では、まず軽動詞の特徴と範囲を明確にする。結論から述べれば、軽動詞構文は〈出現〉を表す構文であり、その〈出現〉の意味は、動詞の語彙の意味から派生されるとする。

軽動詞は、本来の語彙の意味が軽くなった動詞とされる。しかし軽動詞の意味の軽さは、たとえそれが同一の動詞であっても、目的語によって左右される。軽動詞と目的語は、密接に関わっており、軽動詞だけ取り上げて論じることはできない。そのためここでは軽動詞構文として、目的語を含めた形で論じていく。

視点としては、軽動詞構文が〈出現〉の意味を持つことを示すために、カテゴリースキーマを通して考察する^{*1}。各々の軽動詞構文は、共通して〈出現〉の意味を持つが、その意味は〈存在〉から派生することを、カテゴリースキーマで表現していく。さらに語彙の意味からの派生を示すために、意味のネットワークを提示する。語彙の多義性は、メタファーやメトニミーを用いて論じられることがほとんどである。本稿ではそれに加え、メタファーやメトニミーによらない、カテゴリースキーマを通してできる意味のネットワークがあると考え、それを提示する。この意味のネットワークを通して、異なる視点で意味拡張をとらえることが可能になると主張していく。

2. 軽動詞構文の意味

軽動詞構文の意味には、まず目的語に来る行為名詞の考察が必要である。典型的には、目的語には a V、つまり不定冠詞の後ろに動詞と同形の名詞が来る。この a V は、強い動作性を残しながら、不定冠詞が付くことでモノ化している。いわば一連の動作／行為を切り取って、モノ化したと言え

る。モノ化しているため、形容詞によって様々な修飾を受け入れ、豊かな表現が可能となる。しかしこれら修飾要素は、動詞一語で表したときに、必ずしも副詞に置き換えられないこともある。軽動詞構文と一語動詞は、同じではない。

目的語に強い行為性があるので、軽動詞の意味が軽くなる。つまり軽動詞の語彙的意味の軽さと、目的語名詞の行為性の強さは連動している。このことは同一の軽動詞であっても、目的語が持つ行為性に応じて、軽動詞の語彙的意味の軽さの度合いが変わることを意味している。そもそも軽動詞は、語彙的意味が軽くなったものをさす。しかしその軽さの度合いは、幅があり一様ではない。目的語が持つ動作的意味が強ければ、動詞の語彙的意味は軽くなるし、一方、目的語の動作的意味が弱ければ、動詞の語彙的意味は強くなる。(2a)では目的語の動詞的意味はなく、動詞は通常の語彙的意味を持つ。(2b)では逆に目的語が動詞的意味合いが強く、動詞の語彙的意味が軽くなっている*2。

- (2) a. She makes a box for her tools. b. She makes a display of arrogance.

さらに目的語の行為性と同時に、譲渡可能性も連動して変化する。譲渡不可能な目的語が、軽動詞構文との相性がよい。これは軽動詞構文の目的語が、行為対象ではなく、モノ化した行為だからである。譲渡可能性が高ければ高いほど、行為対象としてなりやすい。一方譲渡不可能な目的語であればその分、行為対象とはなりにくいため、軽動詞構文に現れやすくなる。

またそれぞれの軽動詞によって、語彙的意味の軽さは異なる。極めて軽い意味の do のような軽動詞もあれば、give など語彙的意味が残る軽動詞もある。こうした軽さや幅の違いは重要で、この視点が抜けてしまうと、軽動詞を正しくとらえることができない。軽動詞は単に、語彙的意味が軽くなった透明な動詞で、名詞化した行為に、行為性を加えるだけの冗語的表現ではない。意味が軽くなったとしても、語彙的意味が透明になるわけではない。語彙的意味の何かが残ると考えられる。その証拠に、目的語によって軽動詞が使い分けされる。

- (3) a. I had a good sleep. b. *I took a good sleep. (相沢 1999: 100)

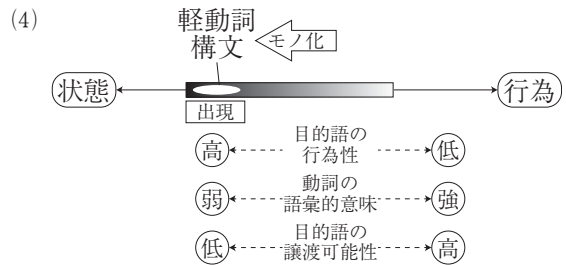
軽動詞がすべて同じように透明化されるのであれば、使い分けは起こらない。透明化するのではなく、基本意味以外がそぎ落とされていく。個々の軽動詞によって基本意味が異なるので、使い分けがおこる。この基本意味を、本稿ではカテゴリースキーマと考える。たとえ異なる軽動詞で、同じ目的語をとるにしても同様で、そこには意味の違いがある。その意味の違いもまた、カテゴリースキーマに帰因する。カテゴリースキーマの違いが、目的語の選択に影響を及ぼし、使い分けがおこり、意味の違いが生じている。

最後に軽動詞構文には、共通の意味があると主張したい。そのためにはまず、軽動詞構文がそもそも何かを考える必要がある。軽動詞の目的語は、動作性の強い名詞である。単独の動詞として成立する内容を備えている。それが名詞として表現され、行為がモノ化している。このモノ化した行為に、何らかの作用を及ぼすのが軽動詞といえる。

その作用を、本稿では〈出現〉の意味、ひいては、〈出現〉のカテゴリースキーマと考える。つまりモノ化された行為が出現するという、状態寄りの意味になるのが軽動詞構文と考える。むしろ軽動詞構文は、語彙的意味の軽さに幅がある。語彙的意味が残れば残るほど、個々の動詞の語彙的意味

が作用して、この〈出現〉の意味合いは薄くなる*3。しかし逆に、語彙の意味が薄れれば薄れるほど、軽動詞構文が持つ共通性、すなわち〈出現〉の意味が生じる。〈出現〉の典型には[軽動詞+a V]の構文がある。(4)は上で述べたことをまとめた図式になる。

(4)では、軽動詞構文が状態寄りの位置で、〈出現〉の意味を持つことを示している。そして行為動詞がモノ化することで、この構文が生成されることも示している。軽動詞構文は幅があるが、それに連動しているものがある。1. 目的語の行為性、2. 動詞の語彙の意味、3. 目的語の譲渡可能性である。目的語の行為性が高くなればなるほど、軽動詞の語彙の意味は弱くなり、目的語の譲渡可能性も低くなることを示している。軽動詞とその目的語は、密接に関連し、連動している。



3. カテゴリースキーマ

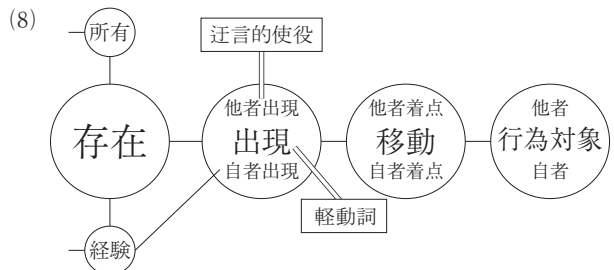
本稿の目的は、カテゴリースキーマを用いて2つのことを示すことにある。一つは、軽動詞構文に共通する〈出現〉の意味がある。二つめは、意味のネットワークの提示になる。各々の軽動詞構文が、もとの語彙の意味からどのように派生するかをカテゴリースキーマを通して示す。

まず共通する意味〈出現〉から見ていく。(5) Place(X) (6) Place(X) (7) Sbj NP Place(X) Obj NP NP
〈出現〉は〈存在〉のカテゴリースキーマと関連している。存在はそもそも、ある場所にモノが存在することである。これをカテゴリースキーマで示したものが(5)である。場所のカテゴリー(Place(X))の中に、成員としてモノ(NP)が存在する。この(5)の構造になるよう、何かが新たに出現するという意味が、〈出現〉である。矢印でこの出現を示したものが、スキーマ(6)になる。〈出現〉は存在表現と関連している。

軽動詞構文は、この〈出現〉(6)に、主語が関与する構文になる。スキーマで示したものが(7)になる。主語が関与することを、カテゴリーと成員の関係に置き換えている。本稿で考えるカテゴリーは、結びつきが弱いもの、例えば「関係があるもの」もゆるやかな集合体としてカテゴリーに含める。そのため関与するものは、成員とみなす。(7)では、主語カテゴリーの中に、〈出現〉構造が成員として含まれている。このことで出現構造に、主語カテゴリーが関与することを示す。この構造をすべての軽動詞構文が持つことを示していく。(8)

なお確認であるが、〈出現〉=軽動詞構文ではない。〈出現〉の意味を持つ、語彙的用法は、他に存在する。

次に意味のネットワークがある。軽動詞構文は、単独で存在するのではなく、意味のネットワークの中で位置づけられ



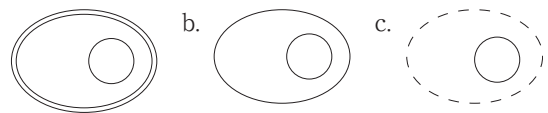
る。(8)に軽動詞表現のネットワークを示す。これはメタファーやメトニミーを用いない意味ネットワークの可能性を探るもので、カテゴリースキーマをもとに広がるものになる。緒方(2016)で用いた迂言的使役構文のネットワークを広げたものになるが、意味のネットワーク全体を示しておらず、あくまで暫定的なものとして論じていく。

(8)はモノの視点を通したネットワークで、円が意味、□が構文または動詞の種類を表している。〈存在〉はモノがある場所に存在するという意味、〈出現〉はある場所に新たにモノが存在することになるという意味、〈移動〉はある場所から別の場所へモノが移動するという意味、〈行為対象〉はモノが行為対象になるという意味になる。〈出現〉〈移動〉〈行為対象〉には各々2種類あり、自者と他者の選択肢がある。むろんこれは暫定的ネットワークで、軽動詞構文を説明するための意味のネットワークになる。

(8)は2つのことを示している。一つは軽動詞構文の意味で、〈出現〉の意味を持つことを示している。軽動詞は、目的語に「モノ化した行為」をとる。そのモノに対して、軽動詞がどのような働きをするかが問題となる。本稿では軽動詞は、「モノ化した行為」が新たに存在すること、すなわち〈出現〉の意味を付加すると主張する。軽動詞構文は共通して〈出現〉の意味を持ち、それに個々の軽動詞の意味が加わり、使い分けが生じている。本稿ではこの〈出現〉の意味をカテゴリースキーマで示す。

注意しなければならないことは、軽動詞すべてが〈出現〉の意味を持つとしても、各々の語彙的意味の基本義は必ずしも〈出現〉ではない。have は〈存在〉、make は〈出現〉、give, take, get は〈移動〉、do は〈行為対象〉を基本義とする。この基本義から派生した意味が〈出現〉であり、その意味の中に軽動詞構文がある。つまり互いの意味は関連付いており、ネットワークをなしている。ちなみに各々の語彙的意味のネットワークとしては、have は〈存在〉を起点とし、〈存在〉から派生した〈所有〉〈経験〉の意味、さらには〈出現〉の意味を持つ。give は〈移動〉を起点とし、〈出現〉の意味を持つ。make は〈出現〉の意味のみを持つ。take は〈移動〉を起点とし、〈出現〉の意味を持つ。get は〈移動〉を起点とし、〈出現〉の意味を持つ。do は〈行為対象〉を起点とし、〈移動〉〈出現〉の意味を持つ。これらの意味の展開を、4節以降でカテゴリースキーマを通して示していく。

最後にカテゴリースキーマの表記 (9) a. で、カテゴリーと成員の関係について述べておきたい。主語カテゴリーが、

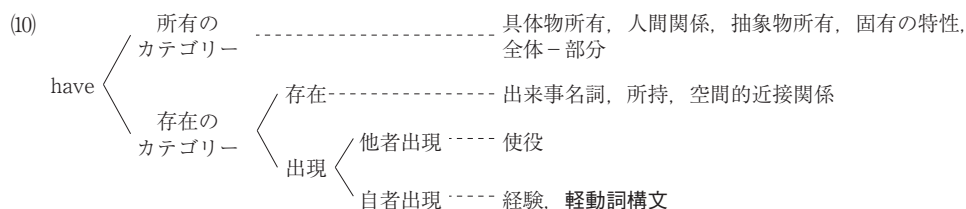


その成員(存在構造)に関与する仕方には、3種類ある。強く・普通・弱くのいずれかで関わる。それを示したのが(9)になる。(9a)は緊密度が高く、成員への関わりが強い。make, give, take, do がこのパターンになる。(9b)は緊密度が普通で、成員への関わりもさほど強くない。(9c)は緊密度が弱く、成員への関わりも弱くなる。get, have がこのパターンになる。ただし文脈に応じて、一つのパターンではなく、複数のパターンにまたがることも決して珍しいことではない。

以上の考察を踏まえ、以下具体的に軽動詞構文がどのようなカテゴリースキーマを持ち、どのように語彙的意味のスキーマから展開し、〈出現〉の意味を持つかを示していく。

4. have

have は〈存在〉と〈所有〉の意味に大きく分けられる。全体的な意味の広がりを示したのが(10)で、緒方(2016)を一部修正したものになる*4。



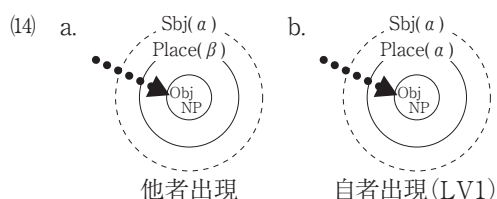
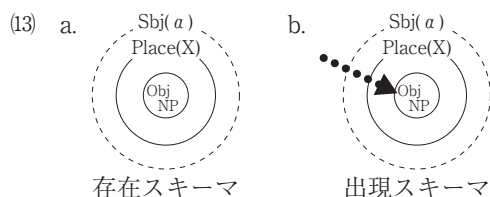
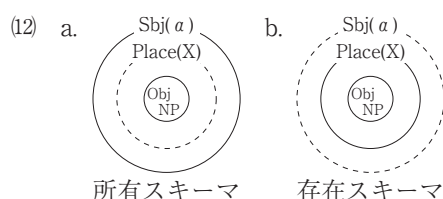
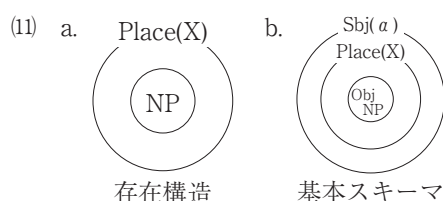
(10)から分かるように、軽動詞構文は独立して存在するのではなく、have の基本カテゴリースキーマから導かれた意味の一つにすぎない。詳細は緒方(2016)に譲るが、全体像を簡略に説明する。

緒方(2016)では have は、存在構造(11a) (= (5))に、主語が関与する意味とした。スキーマで示すと(11b)になる。(11b)では主語カテゴリー(Sbj(α))の中に、成員として存在構造が含まれている。主語が関与することを、カテゴリーと成員の関係に置き換えている。存在構造を成員に持つことで、主語が存在構造に何らかの関わりを持つことを表している。

基本スキーマ(11b)は、カテゴリーと成員の緊密度の違いで2つに分けられる。所有スキーマ(12a)と存在スキーマ(12b)である。所有スキーマは、存在の意味が弱く(Place カテゴリーが破線)、主語の関与の意味が強くなっている(主語カテゴリーが実線)。典型的には所有の意味がある。一方存在スキーマでは逆に、存在の意味が強く(Place カテゴリーが実線)、主語の関与の意味が弱くなる(主語カテゴリーが破線)。have の意味は多様であるが、この2つに分類される(用法については、(10)及び緒方(2016)を参照のこと)。

この存在スキーマは、さらに2つに分けられる。一つは単純に〈存在〉を表す(13a) (= (12b))と、もう一つは〈出現〉を意味する(13b)がある。〈出現〉とは新たに出現し、ある場所に存在するようになったという意味であり、存在の一種になる。〈出現〉することを、矢印で示している。

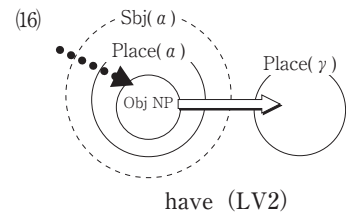
〈出現〉は、さらにどこに出現するかで2つに分けられる。一つは主語と異なる場所 Place(β) (主語 α と異なる指標)に出現するものを、他者出現と呼ぶ((14a))。この用法として、迂言的使役構文がある(cf. 緒方 2016)。



もう一つは主語と同じ場所 $\text{Place}(\alpha)$ (主語 α と同一指標) に出現するものを、自者出現と呼ぶ ((14b))*⁵。have の軽動詞構文は、〈自者出現〉(14b) の意味になる。これは相沢(1999: 87) の表で、他者への動作・情報伝達・感情・意思がないことから確認することができる。have の軽動詞構文は、行為から切り取ってモノ化した行為を、自者 ($\text{Place}(\alpha)$) に出現させるという意味になる。この例が(15)である。(15)では、have の後ろに現れる目的語を列挙している。a が身体動作、b がことばによる相互活動／知的状態、c がその他になる (cf. 相沢 1999: 59-68)。

- (15) a. have – a smell, a taste, a walk, a swim, a fall, a sleep, a look, a shower, a feel, a cry, a laugh, etc.
 b. have – a chat, a dispute with, a debate about, a comment, a distrust of, a guess at, a grasp at, etc.
 c. have – a display, an impact, smash, etc.

また自者に出現した後、特定の場所へ移動する場合もある。これを示した(16)では、自者 ($\text{Place}(\alpha)$) に出現した後に、特定の場所 ($\text{Place}(\gamma)$) に移動する。 $\text{Place}(\gamma)$ は目標となる場所であるから、移動といえども方向のみを指し示す。(23)に軽動詞構文の例を示す。後続する前置詞句が、 $\text{Place}(\gamma)$ を表す。



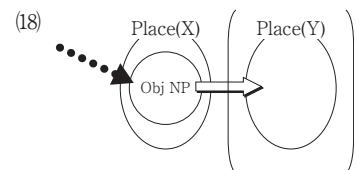
- (17) have – a love for, respect for, a dislike for, pity on, a try at, (no) objection to, etc.

have 軽動詞構文の目的語の分類については、ここでは細部に入らないことにする。ただ Wierzbicka(1982) が述べるように、意味的な制限がいくつかある。一つは短い時間で、持続、繰り返しが可能なもの、二つめに着点となるような外的目的がないこと、三つめに動作主にとって楽しかったりプラスになるものがある。三つめを除き、(14b) のカテゴリースキーマから導きだされる。

まず不定冠詞に導かれる行為は、行為から切り取った不定のモノ化された行為である。不定であるが故に、同じものが数多くあるため、繰り返し、ひいては持続が可能となる。またそれらが出現するために、区切られた行為の含意がでる。そのため短時間の含意がでる。次に外的目標があれば、目標までの着点移動が含意される。have は〈移動〉に力点があるのではなく、〈存在〉ひいては〈出現〉に関わる動詞であり、そこに力点がある。そのため外的目的との相性は悪い。最後の楽しいものは、語用論的に定まると考えられるので、ここでは議論しない。以上 have の軽動詞構文は、〈出現〉ひいては〈自者出現〉の意味を持ち、さらに〈出現〉の後、移動するという意味を持つ。この意味が、have 自体の意味ネットワーク上に、位置づけられる。

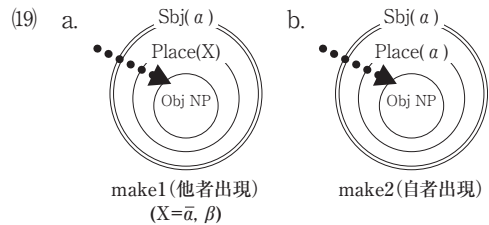
5. make

make は〈出現〉を基本義とするが、〈出現〉したのち〈移動〉する意味もある。この2つの意味をまとめて示したものが(18)になる。この意味展開は、have の軽動詞構文と似ている。 $\text{Place}(X)$ に目的語名詞が出現するのが基本だが、 $\text{Place}(Y)$ まで移動するものもある。



この(18)に主語カテゴリーが関与する。まず基本義の〈出現〉だが、〈出現〉する場所の違いで2通りある ((19))。 (19a) では $\text{Place}(X)$ が、不特定の $\bar{\alpha}$ (主語の α 以外) か特定の β になり、他者出現とな

る。自者ではなく、他者での出現を意味する。二重目的語構文になる場合は、特定の β になる。一方(19b)では、Place(X)が自者 α になっており、自者出現を意味する。どちらも主語カテゴリーは〈出現〉に強く関与するため、二重線で表記されている。(20)に(19a)の例、(21)に(19b)の例を示す。

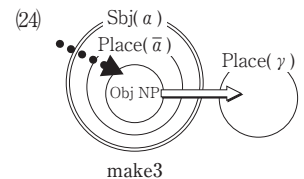


- (20) a. They makes their own clothes. b. My mother made me a birthday cake.
(21) a. Her husband makes \$100,000 a year. b. He would have made an excellent scholar.

このとき軽動詞構文も〈出現〉を意味するため、(19)と同じカテゴリースキーマになる。(22)に(19a)の例、(23)に(19b)の例を示す(cf. 相沢 1999: 68-79)。

- (22) make – a cut, a promise, a review of, a display of, an estimate of, a check, a test of, a wreck, etc.
(23) make – a move, a detour, a catch, a find, a leap, a dodge, a guess at, a halt, a start, a stop, etc.

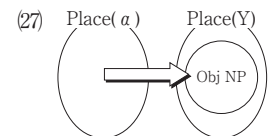
次に他者に出現した後に、特定の場所へ移動する場合がある。これを示した(24)では、不特定の自者以外(Place($\bar{\alpha}$))に出現した後に、特定の場所(Place(γ))に移動する。Place(γ)は目標となる場所であるから、方向を指し示すだけとなる。(25)は語彙的意味が強い例になる。一方(23)は軽動詞構文の例になる(cf. 相沢 1999: 68-79))。



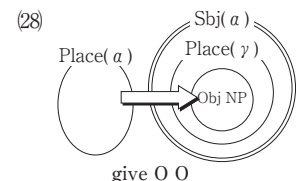
- (25) make – a threat against, an apology for, an invasion into, a journey to, an impression on, etc.
(26) make – an assault on, an attack against, a grab at, a snatch at, a stab at, a stab at, a dive into, a dash for, an approach to, a visit to, an address to, comments on, a reply to, a bet on, one's proposal to, a wish for, an appeal for, a request for, a demand for, a charge against, a stand against, etc.

6. give

give の基本義は自者から他者への〈移動〉になる。これを示したものが(27)になる。自者(Place(α))から、他者(Place(Y))へ移動する。この(27)に、主語カテゴリーが関与していく。



まず Place(Y) に、主語カテゴリーが関与するのが(28)になる。構文は二重目的語構文になる。Place(Y) は間接目的語により特定されるので、Place(γ) と表記する。主語カテゴリーは到着の結果に関与するため、移動物は主語カテゴリー内に位置する。例文は(29)になる。



- (29) She gave him a bike for his birthday.

次に Place(α) に、主語カテゴリーが関与するのが(30)になる。(30a) は Place(Y) が特定される場合で、Place(γ) と表記されている。具体的には、to 前置詞句として現れ、give O to O 構文になる。このとき主語カテゴリーは到着の結果に関与しないため、Place(γ) は主語カテゴリーの外に置かれる。例は(31)になる。

- (31) He gave his ticket to the woman at the entrance.

一方(30b)はPlace(Y)が不特定で、Place($\bar{a}$)と表記される。移動の着点が表現されないで、移動の結果が含意できない。そ

のため移動物は、自者カテゴリー(Place(a))の中に位置する。移動物は、自者から移動するという方向のみを示す。例を(32)に示す。

- (32) a. His friend gave a small donation. b. He would give anything to see her again.

この基本義をもとに、give は軽動詞構文〈出現〉へと展開する。(28) に対応する〈出現〉スキーマが(33)で、二重目的語構文になる。主語カテゴリーが移動の結果に参与するため、モノ化した行為はPlace(γ)に出現する。(34)に例を示す(例は相沢 1999: 51-52)。

- (34) give one's hair a brush, give one's nose a blow, give the coin flip,

give the hat a fling, give the door a heave, give the child a hug, give the ball a hard kick, give the rock a lift, give the trousers a press, etc.

次に(30)に対応する〈出現〉スキーマが(35)で、単一目的語構文になる。(35a)はto前置詞句を伴うもので、Place(a)にあったモノ(行為名詞)が、他者(Place(β))に出現することを示してい

る。しかしこの用法の軽動詞構文は存在しない。なぜならば主語カテゴリーが、出現に関与しないからである。〈出現〉はPlace(γ)でおこるが、主語カテゴリーの外にある。そのため移動の結果に、主語カテゴリーは関与しない。そのため非文となる。(36)に例を示す*⁶。

- (36) a. *He gave a punch to her. b. *She gave a pat to him on the shoulder.

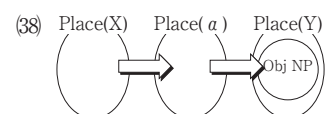
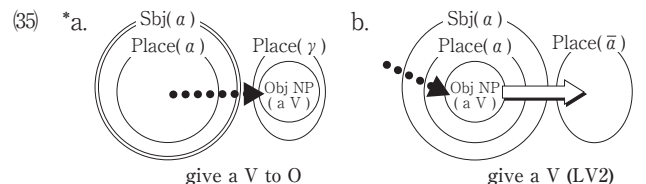
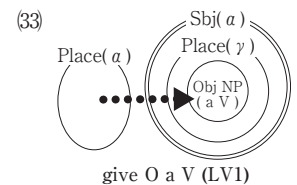
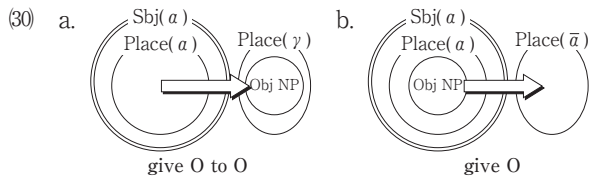
最後に単一目的語構文で、to前置詞句がない(35b)では、モノ化された行為が、Place(a)に出現した後、不特定の他者(Place($\bar{a}$))へと移動する。着点となるPlace(Y)が不特定なので、単なる移動のみを表す。ここでは主語カテゴリーがPlace(a)での出現に関わるので、軽動詞構文として適格になる(例は相沢 1999: 45-46)。aが口頭の行為で、bが人の身体動作や顔の表情などになる。

- (37) a. give – a cry, a howl, a shout, a snarl, a yell, a scream, a shriek, a squeak, a groan, a moan, a gasp, etc.

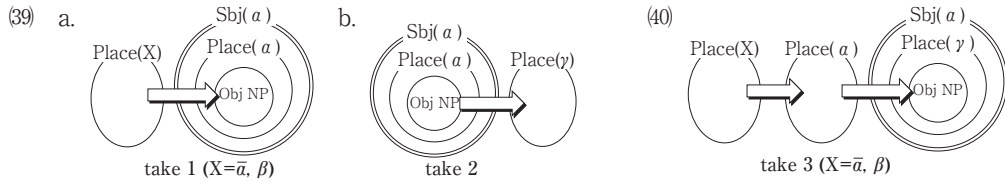
b. give – a bow, a nod, a salute, a shake, a wave, a jump, a start, a skip, a twirl, a shudder, a scratch, etc.

7. take

take は、自者が中心の移動を基本義とする。(38)に示すように、他者(Place(X))から自者への移動と、自者から他者(Place(Y))へ



の移動がある。しかし前者、自者への移動が優勢である。この(38)に主語カテゴリーが関与する。それを示したのが(39) (40)である。



まず(39a)は、Place(X)から自者 Place(a)への移動を示している。このとき主語カテゴリーは、着点の自者(Place(a))に関与する。Place(X)には不特定の $\bar{a}$ か、特定の β が入る。例を(41)に示す。take は主語の関わりが強いので、主語カテゴリーはすべて二重線で表記される。

- (41) a. Did the bank robbers take anything valuable? b. Can you take your books off the desk?

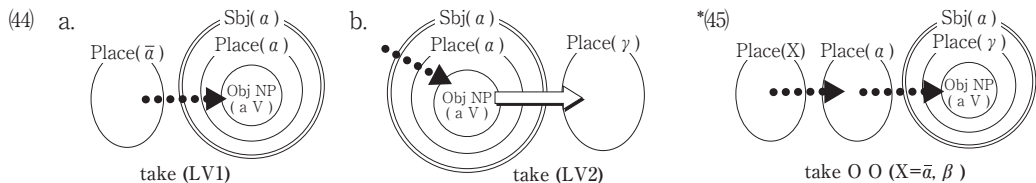
次に(39b)では自者 Place(a)から、他者(Place(Y))への移動を表す。このとき Place(Y)には、特定の γ が入る。他者(Place(Y))は単なる目標にすぎないため、モノ化された行為は Place(a)にある。この目的語の移動には、主語 a も同伴する場合がある。例は(42)になる。

- (42) a. Could you take this to the bank for me? c. The student took us to the classroom.
b. This loan took the total loan to £50 million.

さらに take は二重目的語構文になる。そのスキーマが(40)になる。Place(X)から移動してきたものが、自者(Place(a))を経由して、他者(Place(Y))へと移動する。Place(X)には不特定の $\bar{a}$ か特定の β がくる。Place(Y)には、特定の γ が入る。例を(43)にあげる。

- (43) He took his host family a gift yesterday.

この〈移動〉の意味から、〈出現〉の意味へ展開し、take の軽動詞構文が可能となる。対応するスキーマは次のようになる。(44a, b)は(39a, b)に対応し、(45)は(40)に対応している。



まず(44a) (= (39a)に対応)では、Place($\bar{a}$)にあったものが、自者(Place(a))に出現することを表している。例を(46)に示す(例は相沢 1999: 81-82)。

- (46) take – a swallow, a gulp, a swig, a pull, a stumble, a swing, a jump, a step, a turn, a look, a peek, a walk, a bite, a break, a nap, a fall, a shower, a puff, etc.

次に(44b) (= (39b)に対応)では、Place(a)に出現したものが、他者(Place(γ))に移動する。他者(Place(γ))は特定されている。例を(47)に示す。このとき出現に力点が置かれているので、モノ化した行為(目的語)は、Place(a)に位置し、移動の方向だけが示される。

- (47) a. They should take legal action against the president. c. He took a poke at me.
b. He took a punch at his friend. d. She took a glance at the sky.

最後に(45)は、(40)に対応する。しかし take の軽動詞構文にこの用法はない。移動なくして、連続で出現させることに無理があるからと考えられる。例は(48)になる。

(48) *She took him a punch. (Bruening 2016: 56)

なお take は、他の軽動詞と共通の目的語を持つことが多い。相沢(1999: 81-82)が示している例を(49)にあげる。

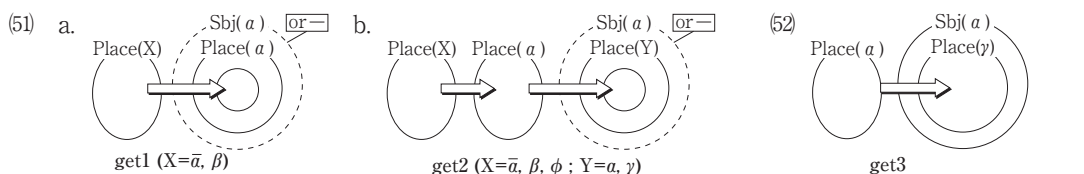
- (49) a. have と共通 – a drink, a sip, a suck, a bite, a nibble, a puff, a whiff, a break, a rest, etc.
 b. make と共通 – a jump, a plunge, a snap at, a step, a turn to, a pose, etc.
 c. give と共通 – a poke at, a punch at, a glance at, a twirl, etc.
 d. get と共通 – a grasp on, a grip on, hold of, a sniff at, etc.

これは take が2つの意味、自者に向かう移動と、他者に向かう移動の両方を基本義にするところに理由がある。つまりそれらのカテゴリースキーマが、他の軽動詞のスキーマと共通部分を持つからである。自者に向かう方向性では make, get, ひいては have が共通部分を持つ。他者に向かう方向性では give が共通部分を持つ。しかしそこには違いがある。なぜならカテゴリースキーマに違いがあるからである。共通の目的語をとったとしても、含意するところが異なる。

8. get

get は、自者への移動を基本義とするが、さらに他者まで移動することもある。これを(50)に示す。他者 X から自者 α に移動し、さらに随意的に Y まで移動する。これに主語カテゴリーが関与するが、get の関わりは基本弱い。関わりが普通になる

こともあるが、強い関わりになるのは使役構文のみとなる (cf. 緒方 2016)。そのため破線(弱い)で示し、一重線(普通)を $\boxed{\text{or—}}$ で示していく。このとき、(51) (52)に示す3通りの用法がある。



まず(51a)では、他者(Place(X))から自者(Place(α))への移動を示している。このとき主語カテゴリーは、自者(Place(α))に関与する。X には不特定の $\bar{\alpha}$ か、特定の β が入る。例を(53)に示す。

- (53) a. She opened the windows wider to get a better look. b. He got a letter from her yesterday.

次の(51b)では、X から α に移動し、さらに Y へと移動する。主語カテゴリーは、Place(Y)に関わる。このとき X は不特定の $\bar{\alpha}$ 、特定の β 、現れないの ϕ の3種類がある。また Y は α 自身、特定の他者 γ が入る。典型的には二重目的語構文が、この用法になる。自分自身(-self 形)が着点となれば Place(Y)は Place(α)で、それ以外が来れば Place(γ)となる。例を(54)に示す。

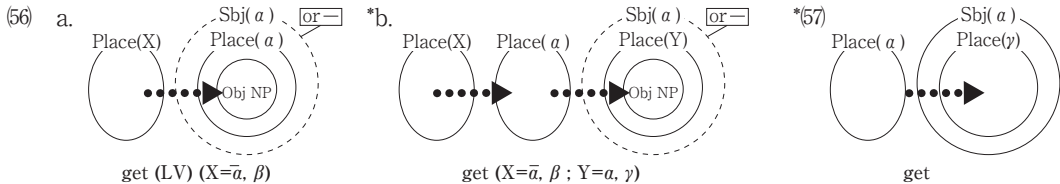
- (54) a. She got me a blanket. b. You should get yourself a car.

この(51b)で X が ϕ のときは、別の意味となる。 ϕ ゆえに、Place(X)は表記されない。このとき

移動してくるモノが何もないので、自らが移動する。それが52になる。Place(α)自身が、Place(Y)へと移動する。このとき Y は特定の γ になり、着点が明記される。例を55)に示す。get の移動には、目的語以外が移動する場合もある。

- (55) a. What time did she get here? b. He didn't get to bed until midnight
c. Where do we get on the train?

この〈移動〉が、軽動詞構文の〈出現〉へと展開する。スキーマで表したものが56)57)になる。



まず(56a, b)は、(51a, b)に対応する。(56a)では、行為名詞が自者(Place(α))に出現する(例は58)。

- (58) get – a kick, a shock, a welcome, a good look, a grasp on, a hold of, a control of, exercise, a sniff of, the shakes, the shudders at, a rest, a good sleep, a great start, etc.

(例は相沢 1999: 92-93)

一方(56b)では、Place(X)にあったものがPlace(α)で出現し、続けてPlace(Y)で出現する。しかしこの用法は、get の軽動詞構文にはない。これには2つ理由があると考えられる。一つは同じものが、別の場所で連続して出現すること自体が不自然である。もう一つは、他者での出現を引き起こすだけの力が、get にないからと考えられる。get は基本、主語の関わりが弱い。他者での出現を引き起こすことができない。そのため不適格になっていると考えられる。

また57)は52)に対応しているが、これも軽動詞構文の用法がない。というのも α は自者であってすでに存在している。すでに存在しているものが、新たにPlace(Y)に出現することなど、ありえないからである。そのため get の軽動詞構文は(56a)のみになる。

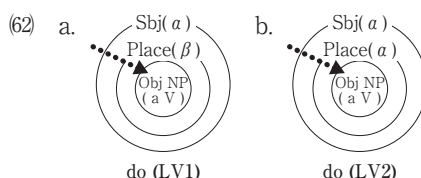
なお get は、軽動詞構文としては周辺的である。この理由として、get 自身が持つ行為性が弱いため、他者に出現させる力がないからと考える。get は本来、関わり方に指定がなく二重線、一重線、破線すべてあり、意味も広い。しかし軽動詞構文の用法では、主語の関わりが弱く、極めて限定的になる。なお get には〈出現〉の意味を持つ語彙的用法は、軽動詞以外に数多くある。

9. do

do は語彙的意味そのものが軽い動詞で、行動を表す最も一般的な動詞と言える。日本語の「する」に対応する。意味も多岐にわたるため、do の全体的なスキーマここでは考察しないこととする。ただ(8)でいえば、〈行為〉を基本義とし、〈移動〉と〈出現〉に意味が展開する。〈存在〉の意味はない。(59)が行為、(60)が移動、(61)が出現の例になる。

- (59) a. Are you doing anything this evening? b. He did his homework every night.
(60) a. He will do you a copy. b. I must do her a present anyway.
(61) a. Who's doing the food for the party? b. Can she do a Cardiff accent?

軽動詞構文においては、do は周辺の軽動詞になる。
 用例は限定されるが、他者出現の意味と自者出現の意味
 の両方を持つ。他者出現のスキーマが(62a)で、自者出
 現のスキーマが(62b)になる。



まず他者出現(62a)では、主語カテゴリーと異なる指
 標を持つ Place(β) に行為名詞が現れる。行為名詞には a V に加え、他の限定詞がつくもの、日常
 の仕事を表す ing 形など多様である。例は(63)になる(例は相沢 1999: 90-91)。a は日常的仕事、b
 は特定の仕事、c は名誉／被害を表している。

(63) a. do – the wash, the cleaning, cooking, copying, drawing, hunting, knitting, packing, painting, re-
 pairing, sewing, shopping, sightseeing, swimming, washing, writing, thinking, one's
 share, etc.

b. do – a check, research, a review, an interview, a sketch, a sum, a count, etc.

c. do – damage, harm, murder, honor, etc.

次に自者出現(62b)では、主語カテゴリーと同じ指標を持つ Place(a) に行為名詞が現れる。具体
 例を(64)に示す(例は相沢 1999: 89)。

(64) do – an act, a dive, a jump, a turn, a twirl, a dance, a jig, a waltz, a somersault, stunts, etc.

do が軽動詞として生産性がないのは、一つは主語カテゴリーの関与が普通(一重線で表記)で、do
 自体の語彙的意味が軽いことにある。軽いがゆえに、スキーマ自体に特徴がなく、どんな〈出現〉な
 のかという特徴付けがない。軽動詞構文は、モノ化した行為名詞に、行為を付け加えるだけの表現
 ではない。それ以外の要素を加える表現である。そのため do のような軽い語彙的意味の場合、行
 為名詞が a V ではなく、それ以外の-ing 形式が日常生活などにより表現することで色合いを加え
 ているように考えられる(cf. 相沢 1999)。

10. まとめ

本稿では、軽動詞構文が〈出現〉の意味を持つことを、カテゴリースキーマで表記した。そして各々
 の軽動詞構文の違いは、語彙的意味のカテゴリースキーマを展開したものであり、意味のネットワ
 ークの一部をなすことを示してきた。この意味ネットワークもまた、カテゴリースキーマで関連づけ
 られており、他構文への適用の可能性を持っている。各軽動詞構文の細かな制限まで、取り扱うこ
 とが出来なかったが、今後の課題としたい。

注

*1 迂言的使役動詞も〈出現〉の意味を表す(cf. 緒方 2016)。軽動詞構文もまた、一語動詞で表現できる
 ことを迂言的に表現する。迂言的表現と〈出現〉の意味には、何らかの関連があるかも知れない。

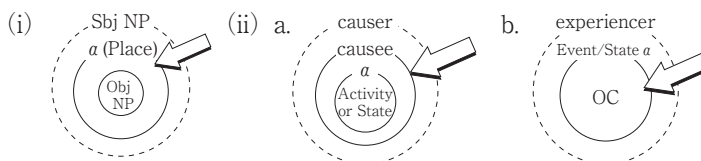
*2 群動詞も同様で、動詞の意味は、後続する副詞・前置詞の意味の強さに応じて、変化する。

*3 相沢(1999: 187)では、動詞の意味が軽い(delexical)なものほど受動態になりにくいと述べている。
 これは語彙的に意味が弱くなればなるほど、目的語の譲渡可能性も低くなり、他動性がなくなるか

らと考えられる。

*4 (10)においては〈出現〉の他者出現と自者出現の用語が、緒方(2016)と異なっている。

*5 緒方(2016)では、(13b)は(i)、(14a, b)は(11a, b)と表記していた。緒方(2016)と本稿の違いは、1. 出現するもの



を目的語 NP に限定したこと、2. (14a, b)の両方に Place カテゴリーをおいたことがある。こうした理由は、a. 存在構造を含むのが have 構文であるという主張に一貫性を持たせるため(11b)にも Place カテゴリーを置く方がより自然であること、b. 出現するものを目的語 NP に限定することで、より統一的な説明が可能になること、c. 〈出現〉においては、内部カテゴリーが、外部カテゴリーと同じか異なるかが重要な要因となっていることがある。しかしながら緒方(2016)で主張した内容は、本質的には同じと考える。

*6 相沢(1996: 1)で比喩的意味の場合、give a V to O の形をとる用例があることが指摘されている。しかしながら比喩的意味になった段階で、もはやそれは動作ではなく、行為の出現でもない。そのため比喩的意味は、軽動詞構文に含まれないと考える。

参考文献

- Allan, Q. (1998) "Delexical verbs and degrees of desemanticization," *Word*, 49(1), 1-17.
- 相沢佳子(1996)「*?Give a push to the Door」*GDM News Bulletin* 48, 14-18.
- (1999)『英語基本動詞の豊かな世界—名詞との結合に見る意味の拡大』東京：開拓社.
- Bruening, B. (2016) "Light Verbs are Just Regular Verbs," *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 22(1), 7, 51-60.
- Dixon R. M. W. (1991) *A new Approach to English Grammar on Semantic Principles*. Oxford: Clarendon Press.
- Grimshaw, J., & Mester, A. (1988) "Light verbs and θ -marking," *Linguistic Inquiry* 19 (2), 205-232.
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井口智彰(2011)「Take (Have, Give) a V 構文の意味・機能分析」『日本認知言語学会論文集』11, 498-504.
- Jespersen, O. (1909-49) *Modern Grammar on Historical Principles*, III, VI. London: George Allen & Unwin.
- 草山学(2012)「HAVE 関係を導く 2つの推論プロセス: give 軽動詞構文の曖昧性をめぐって」『関東学院大学文学部紀要』126, 23-66.
- 松井千枝(2009)「軽動詞構文 have a V の統語的・意味的・文体的研究」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』39, 71-82.
- Stein, G. & R. Quirk (1991) "On Having a Look in a Corpus," in: K. Aijmer & B. Altenberg, eds. *English Corpus Linguistics*, 197-203. London: Longman.
- Wierzbicka, A. (1982) "Why can you have a drink when you can't *have an eat?," *Language* 58 (4), 753-99.
- (1988) *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)